

大西道雄著

『意見文指導の研究』

理論と実践を切り結んでいくことは、必ずしも容易なことではない。理論的研究を

どう実践化・具体化するか、実践でつかんだものをどう理論化・体系化するかという

問題は、国語教育研究において常に念頭におくべき問題であるように思われる。大西道雄先生は『学習の手引きによる国語科授業の改善』（昭和六二年 明治図書）などの著書において、一貫して授業実践を正面に見すえた理論構築を目指してこられた。

本書はそのような性格を重ねて持ち合わせている上に、授業実践（意見文指導）に資する原理や方法を、仮設―実験―検証という実験的手法により、より客観的に明らかにしようとした点に一つの方法論上の特徴がある。

以下、本書の内容上の特徴を紹介したい。大西先生は、意見文指導を支える基礎研究として、書くことがまとまり、文章が産出されるに到る思考プロセスを「創構」（インベンション）すなわち、「アイデア（思想）の創出とその組織化」という概念でとらえ、その内実の究明をはかり、創構の生成原理を以下の4点に集約する。

1 「場」による主体の形成／2 問題意識の喚起による「対立（問題）」の発見／3 問題解決のための思索・追求／4 行動の原理としての理念の成立

また創構過程のモデル化を試み、そこに1 感想型意見 2 思索型意見 3 解決型意見の3つの類型が指定されている。これらの理論的仮設は、多くの作文事例の分析や実験によって丁寧な検証されていることも見逃せない。

また、その作文の分析の過程で体験的に掌握され、さらにある精神療法に携わる研究者の論文に示唆を受けて、生徒が意見を形作っていく際にオーガナイザーとして働くキーワードの存在に着目する経緯には、実践と理論の融合する醍醐味を感じさせてくれるものがある。この経緯から産出された有益な考え方として、次のようなものが提出されている。すなわちある文章をよんで意見を形成するために、読み手がその文章中で注目するキーワード「内容」キーワードは、読み手の意見の内実を形作る核となり、接続語・思考操作語句・判断を示す文末語句論などの「論理」キーワードは、論を構成し、展開する働きをするというものである。これらキーワードの存在とその作用の実態についても、実証的に説明することが試みられている。

このような原理的な追求をもとに、本書では、実践面における具体化の方向として、意見文における小学4年から高校3年にわたる創構指導目標の系統化が試みられている。さらに中・高等学校における課題意見の指導実践が各一例づつ報告されており、先の基礎理論研究を踏まえた、特に創構過程における意見の開発・形成の指導に力を注いだ実践報告となっている。

さて、本書の序文には、本書の特色が次のようにのべられている。わが国においては、在来、作文教育における構想の研究は行われてきたが、創構（インベンション）分野に関する、この様な詳細な実験的研究がなされるのは極めて希であった、大西道雄教授の挙げられた一連の成果は、新しい領域の開拓として注目される。（野地潤家先生）

国語教育の学問的追求を心がけるものにとり、本書は、実践とのスタンスのとり方、実践理論としての国語教育論のあり方にわたって目を開かせてくれるものであり、また、理論の根拠を持った意見文指導のあり方を具体的に拓いて見せている点におい

ても、学ぶことの多いものである。

(A5判 三四七ページ 平成二年三月十

五日発行

溪水社

四五〇〇円)

(山元悦子)